

行動学入門

——映画文学人生論

三島由紀夫 (1925-1970)

『行動学入門』1976 「青樹社」

『おわりの美学』(1994) 「文藝春秋社」

『革命哲学としての陽明学』(1959) 「講談社」

『憂国』(1961) 「小説中欧公論」

行動というのはそれ自体の論理を持つて
いる

三島由紀夫は知識人だが、行動の人として死んだ。昭和四十五年十一月二十六日、楯の会隊員四名とともに、自衛隊市ヶ谷駐屯地で東部方面総監を監禁し、憲法改正のため自衛隊の決起を呼びかけた後、割腹自殺——四十五歳だった。

あれから四十五年後の昨今、憲法改正の論議がやかましい。そろそろ三島由紀夫の生まれ変わりが何らかの行動にはしるのではないだろうか。

今さら三島の行動に共鳴して行動にはしる元気は私にはないが、当時は不可解だった事件を知識として理解するために『行動学入門』を読んでみた。「行動というのはそれ自体の論理を持つている」という。

「したがって、行動は一度始まり出すと、その論理が終わるまでやむことがない。これはあたかもぜんまいをまききったおもちゃが、そのぜんまいがゆるみきるまで無限に同じ運動を繰り返すのに似ていると言えよう。知識人にとっては、このような行動の論理がこわいのである」。

知識人とはいえない私でも、行動の論理はこわい。自分自身の行動をふりかえってみても、無謀な行動にはしり、後になってなぜ抑制できなかったのかと反省することがあるが、時すでに遅し。行動はすでに実行に移され、取り返しのつかない結果だけが残っている。



行動学入門

—— 高齢者文学人生論

西郷隆盛は城山における切腹によって、二・二六事件は一部の青年将校たちの決起によって、また特攻隊はそのごく短い時間の特攻攻撃の行動によって人々に記憶された。三島由紀夫の自決も四十五年後の現在も記憶されている、

もっと古い例では大塩平八郎の乱がある。天保八年（1837）の二月十九日、大塩平八郎は兵を起こして大坂市中に火を放ち、貧民救済のためにほとんど望みのない暴動を企て、火中で憤死した。

三島由紀夫は、行動の論理を陽明学の知行合一におき、行動の時期を大塩平八郎が乱を起こした時の年齢に合わせたのではないかと思われる。

陽明学の知行合一は「知ッテ行ハザルハ未ダコレ知ラザルナリ」という王陽明の言葉で簡潔に表明されている。認識と行動は一致しなければならぬ。行動に移らなければ認識は完成しない。

「身の死するを恨まず、心の死するを恨む」と大塩平八郎は『洗心洞筭記』で主張している。肉体の死ぬのを恐れず、心の死ぬのを恐れる。心が本当に死なないことを知っているならば、この世に恐ろしいものは何一つない」と大塩は言い、三島がそれに共鳴した。

二人が行動に踏み切ったのはともに四十五歳のとき。その記憶は今のところ人々の心に残っているが、いつまでも消えないでいるかどうか。

三島忌の帽子のなかのうどんかな

撰津幸彦